

第六章 長崎インターハイ

一 谷川復帰

平成十五年度の三年生

立川(北諫早)林田(桜が原)谷川(深江)成井(茨城)二宮(山梨)清水(吾妻)北平(長与)初田(マネ丸尾)

平成十四年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン 林田 立川 二宮 岩永姉 金床

【案内文書】

谷川 雅 七月十三日に髄膜炎(実はそうではなかった)と診断されて入院。退院後約二ヶ月自宅療養を続けていたが一〇月七日から復帰。フルメニューではないがその日から練習に参加。しかし三日後に頭痛発熱でダウン。完全復帰にはまだまだ時間がかかると思われるが、七月九日以来三ヶ月ぶりにボールの感触を味わった。

立川 美礼 九月二七日に足首捻挫。八月五日以降確実に成長し続けてきたプレイがケガで一瞬にして消滅。ウインターカップ予選(九月二八・二九)では昔の立川に戻ってしまい、何もできずに終わった。その後遺症は少し残ってはいるが、好調時を思わせるプレイが時々出現するようになった。

清水さつき 一〇月九日。半月板切除手術。ディスクイド(円盤状半月板)であり、ディスクイドは片方だけでなく両膝ディスクイドのはずなので、逆の膝も傷めないよう今後も注意が必要だ。

岩永かほり 腸腰筋損傷リハビリ中。

岩永みゆき 一〇月初旬に引いた風邪が抜けない。

初田亜沙美 これまでしばしば胃の調子が悪いといつて休んだことがあったが、胃カメラで検査した結果胃潰瘍と診断された。

三菱重工長崎造船所で建造中だった世界最大の豪華客船ダイヤモンドプリンセス号は、完成直前に船内火災が発生してスクラップ同然になりました。三菱重工の行く末と長崎の経済界への打撃が気になります。

クレインズ「ゆめ総体号」も同じく、今年度はアクシデントの連続ですべての全国大会出場を逸してしまいました。しかし、クレインズ「ゆめ総体号」はスクラップ同然ではありません。修復可能なアクシデントです。修復に時間がかかる箇所もありますが、ものは考えようです。その間に、手を入れたくてもこれまで時間が割けなかった部分に手をかけられると思えばよいことです。

初田(マネージャー)の話に戻します。胃潰瘍といえば中高年男性サラリーマンに最も多い病気ですが、この一年の様々な出来事は、まだ十七歳の初田を胃潰瘍になるまで追い込んでいました。心が痛みます。初田は溜息をつくことも辛そうな顔をするのもなく、いつもにこにこして一見細かいことはまったく気にしない生徒だという印象でした。ニックネームのママは、ニコニコママ(MOM)が由来です。

しかし実は、その屈託のない表情の下では胃潰瘍になるほどの苦悩を抑え込んでいたのです。初田の胃潰瘍を一刻も早く治してやるには、チームが少しでも早く「大丈夫だ」というチームになることです。そのためには、現チームの強化作業を停滞させないことが何より重要ですが、現有勢力の層の薄さを補うために即戦力のビッグセンターとフォワードを獲得するためのリクルートもがんばらなければなりません。今そちらの方が佳境に入っています。

【結果報告】谷川(復帰)清水(半月損傷リハ中)岩永妹(足裏イボ切除で欠場)

谷川 雅 「チームのことなど考えるな。すべての試合を自分の実験のために使え」と言ってコートに送り出しました。プレイはまだまだ本来の出来には遠く及びませんが、公式戦のコートに立たたというだけで充分です。

清水さつき 一〇月十八日に退院。二週間後ぐらいからジョギングを初めていいそうです。まず自転車漕ぎからやらせようと思います。

いので試合には出せませんでした。

岩永かほり 腸腰筋損傷に加えて足の指と裏にできた二個のイボを切除手術しました。まだクツを履けな
林田の目が少しかつたようです。立川はゴール下のシュートをまだ時々落としますが、それは空
中での溜めができないからです。両手に抱えきれないほどあった問題をひとつずつ片付けて、このひとつだ
けが残りました。

空中での溜めができないというのは一年生の金床にもまったく同じことが言えるのですが、立川の場合は
シュートには向かうけれども最後にそうなるってしまうのであり、金床のはシュートに向かいたくないからそ
うなるのですからこの二人は出発点が違います。当然金床の方が治療に時間がかかります。

二宮は今回ディフェンスでずいぶん活躍しましたが、プレイ中に一瞬アタマが真っ白になる症状はまだ完
治していません。

成井は一〇月上旬の二回の遠征では でしたが今回の試合は でした。あがりやパニックを押さえ込める
ようになれば戦力として計算できるのですが。

平川はうまいのですがそれを帳消しにする自滅プレイがまだまだ出ます。

黒石はステツプインができません。ですからアウトサイドシューターで活かそうと思います。

さて、組閣についてご報告いたします。私はずっと立川をキャプテンにできたらそれが一番いいと思って
いました。なぜなら、ゆめ総体は諫早市の小野体育館で行われるからです。しかしそれを断念したのは九月
末のウィンターカップ予選で立川が何もできなかったからです。そんな状態でキャプテンに指名しても本人
の負担が増えるばかりだと思って林田にしました。

でもこの試合で元通りキャプテンを立川に戻すことにしました。八月から九月の立川に少し近付いたから
です。コート上での支配は谷川に受け持って貰うことで立川を補佐してもらい、立川キャプテン谷川副キャ
プテンでゆめ総体号を発させます。よろしくお願いします。

平成十四年十一月 県新人戦 優勝 スタメン 立川 林田 二宮 岩永姉 岩永妹

【案内文書】

入院と自宅療養で休んでいた谷川が三ヶ月ぶりに登校したのは一〇月七日。それから今日まで、本校での
練習が二四回。遠征試合が四回。招待試合が一回。その間腰痛で休んだのが三回。風邪で休んだのが一回。

「急ぐなよ、焦るなよ」と目が合う度に言うのですが「ハイ」と言った直後にエンジン全開。グラウンドでの
五千^歩走も、ゆっくりペースで三回走ったあと二五分ペース（バスケット部員の最低基準）を目安にタイム
を測定し始めたところ、一回目（一〇月二二日）は二五分五一秒で息も絶え絶え。二回目（一〇月二五日）
は二四分二七秒。三回目（一〇月二九日）は二分二九秒と、他の選手に急ピッチで接近。急いでもそんな
に早く全盛時のプレイは戻ってきませんが、それが彼女の性分ですから仕方ありません。自分でブレーキを
かけるのができない谷川の替わりに私がブレーキ係を務め、ストレスを溜めさせないように注意しながら練
習を進めていきます。

前回の報告書では全員へのコメントを書くことと思ってそれぞれ一言ずつ書いたつもりでしたが岩永みゆき
の分を落としていました。彼女の闘争心は一級品です。問題はふたつ。一対一のディフェンスがまだ甘いこ
とと時々自分の思いだけで暴走して自殺プレイをしてしまうことです。でも、一年生なのに落ち着き過ぎて
いるのも気持ちが悪いもの。まだ少々荒っぽいのがいいのかもしれない。

立川は八月の状態に戻りました。あとは、試合前日にケガをしないように注意するだけです。

林田はプレイがよく見えるようになってきましたが、まだちょっとした事件に巻き込まれて舞い上がる場
面が時々出てきます。谷川と清水がりハビリをしている間にこの二人がすっかり主役をやれるようになると

チームはガラリと変わります。当面はそこにポイントが置かれず。

以前は谷川と二宮しか相手に立ち向かう選手がいませんでした。彼女たちからパスを受けてプレイをする選手がまったくいなかったため、谷川と二宮の猪突猛進を容認しなければなりません。しかし、立川と林田がこのまま成長してくればそれも一気に解決します。実は、復帰後発見したのですが谷川は馬力があるだけでなくアシストパスが抜群に巧いのです。受け手がしっかりしてくればこれが活かれます。そういう意味で立川と林田の成長は強いクレインズになるためには絶対不可欠な要素です。この試合はその見通しを立てるのにとっても重要です。

【結果報告】清水（半月板損傷リハ中）岩永妹（足裏イボ手術）

試合前五日間は練習の最後に行うきついフットワークをフルメニュー参加するのは林田・二宮・成井・金床の四人だけ。きつい練習をたった四人だけというのはやらせる方もやる方も気合いが入りません。

立川 元気がなかったため貧血だと思い、検査したが結果は異常なし。単なる蓄積疲労だった。

谷川 調整中

清水 手術後のリハビリ中

平川 三ヶ月前から尾骨が痛くて強いダツシユやキックができない。

黒石 一〇月二五日に捻挫。まだ治りきれず。

岩永み 十一月一〇日に九州女子との練習試合で転倒して右肩を強打。

岩永か 足の裏の花イボ五個。焼いて治療したが新たに四個発生。

療養にもう少し時間がかかるのは清水だけで、他の選手は間もなく復帰か主要メニューには参加できるという程度なので焦りや苛立ちはないのですが、山崎語録によれば「ケガや病気も実力のうち」ですからまだまだホンモノではありません。本当にホンモノになれるか否かはこの冬と来春の出来如何で決まると私は思っています。この時、ケガを引きずっていても本当の強化はできないので、今はちょっとでも異常があれば無理をさせません。

九月末のウィンターカップ予選で生まれ変わった立川を披露したかったのですが前日に捻挫してご破算。地区新人戦ではまだそれを引きずっていたので披露できませんでした。それからひと月。ようやく真打ちとして披露することができました。本当にご心配をおかけしました。もう大丈夫です。

もう県内では負ける心配はないだろうということ、立川と林田に手がからなくなったので、ビデオに収める準決勝と決勝はこれまでバックアップで支えてくれた選手をフル出場させたので点差は開きませんでした。

平成十五年一月 九州春季二次予選 優勝 スタメン 立川 林田 二宮 谷川 岩永姉

【案内文書】

十二月二五日～二七日 九州女子・鳥栖商業・鹿児島女子を招待して強化合宿

〇一月〇四日～〇七日 九州女子・神村学園・北斗商業を招待しての強化合宿

招待にしろ遠征にしろ、強化合宿は一〇分 二分 一〇分を一セットとしたスクリメージを総当たり戦で行います。鶴鳴は年末年始合わせて四五セットを無事戦い切りました。年始の部で立川が捻挫。二宮が相手選手と激突して転倒し、肘を強打しましたがいずれも翌日は復帰するという軽傷で済みました。

今年の九州女子は十一月の地区新人戦で中村学園を倒し、目下福岡では実力ナンバーワン。神村学園と鶴鳴は昨年から下級生で戦っている今年最強。北海道はインターハイ出場枠二という中で北斗商業は二番手が三番手争いで凌ぎを削っているチーム。鹿児島女子は三年生参加のウィンターカップ出場前の強化。というわけで年末年始ともに白熱したスクリメージばかり。とつても充実した強化合宿となりました。

十一月の県新人戦の案内文書に「立川は八月の状態に戻りました」と書きましたが、その後立川は前述の冬休み合宿まで一歩も後退することなく前進し続けてきました。そして冬休み合宿ではまたグンと伸びまし

た。いや、立川だけでなくこの冬休み合宿では控えの選手も含めて他の選手もすべて一回り大きくなった。一回りというのは体格ではありません。人間性・バスケットの理解度・技術すべてにおいてという意味です。

昨年八月四日まで、私はこのチームがどうなっていくのかまったくイメージできずに困惑していました。合宿を終えてあの頃の彼女たちのプレイぶりや顔つきを回想しながらこの文書を書いています。八月四日以前は正体不明の何かに脅かされ、浮き足だつてオロオロしながらコートを右往左往していた彼女たちが今では相手を読み切ろうとするしつかりした目つきで、両足をしつかり大地（床）につけてプレイしているのです。監督の私がああ時の彼女たちと今私の目の前にいる彼女たちが同一人物であるということが信じられません。特に、一月五日の午後の部の最初のスクリーン（対九州女子戦）は入場料を取って観客に見せたいような試合でした。

【結果報告】清水（半月板損傷リハ中）

私の目の前で戦っているチームは冬休み合宿のクレインズとはまったく違うチームでした。公式戦はどんな小さな試合でも公式戦独特の雰囲気がありますから、冬休み合宿と同じようならばいいできればをこの試合でも披露してくれるだろうとは思っていませんでしたが、それにしても私が描いていたイメージとはあまりにもかけ離れた戦いぶりでした。もっとも、ひどいといっても昨年の八月四日以前のように観ているのが気の毒になるような試合ではないので、進歩していると言えは言えるのですが…

例えば、A選手が絶対取れるデフエンスリバウンドを空振りした。でもそれはたいした事件ではない。まだ守れる。なのにA選手は「しまった！」と思つてうろたえるだけ。それで他の四人はそのほころびを織うのに必死。その結果何とか守れた。速攻だ！しかしA選手のうろたえぶりをみんなが引きずっているのです。すつきりした気持ちで走れない。だからB選手がレイアップを落とした。その後A選手は落ち着きを取り戻したが今度はB選手がレイアップを落とした動揺を引きずってしばらくダメ。二日間、ずーっとこんなことの繰り返しでした。

なぜそうなる？それは私から言われたことを理解できるしイメージすることもできるレベルにはなつたのですが、それが体験として自分の身体の細胞の一つひとつに染み込んでいないからだと思います。しかし、体験は回数を重ねれば自分のものになるものではありません。「よしわかった」「やってみよう」「なるほど」で積み重ねられた体験は結果の成否にかかわらず財産として蓄積されていきますが、の間に「大丈夫かなあ」「ほんとにいいの？」というような思いが割り込んでくるといくら体験を重ねてもそれは財産として蓄積されないので。

さて、ゆめ総体まで六ヶ月と十一日。その間二月の九州大会、四月の県下春季選手権、六月上旬の県高校総体、六月中旬の九州高校総体と計四回の公式戦があります。それに加えて三月に一回、四月に二回、五月に二回、七月に二回と計七回の遠征をします。この体験から得たものを私がどのようなことばで導いて選手に「なるほど」を植え付けるか、それが今後のクレインズの飛躍のカギを握っていると思います。

追伸 一月の九州春季大会二次予選で谷川はスタメンに名を連ねました。前年の六月四日以来七ヶ月と十四日振りです。もう大丈夫でしょう。

平成十五年二月 九州春季選手権 三位 スタメン 立川 林田 二宮 谷川 岩永姉

【案内文書】

八日（土）、仕上げ作業として前々から組んでいた練習試合に出かけました。その前日、谷川が風邪で学校を休みました。冬休み合宿中の風邪に比べれば軽い風邪です。私は元氣のない谷川を遠征に連れて行ってフルタイムで試合に出しました。

重村たちからバトンタッチされたあとの谷川は、すべて順調に仕上がりに「さあこんどこそやるぞ」とみんなが張り切っているのに、勝敗を決める大事な場面でチャージングした上に打撲傷を負ってベンチに下がっ

たり、決勝戦の最大のヤマ場で五反則退場するなど、公式戦の重要な場面で充分力を発揮したことがありません。

これは、観衆になんどもよめきを起こさせるすごさと背中合わせに持っている彼女の弱さです。それを排除するか 封じ込めるか うまく折り合いを付けて同居するかしなければ谷川の今後の人生は何も変わりません。ですから風邪がみなのに敢えて遠征に連れて行き、フルタイム出場させるという強硬措置をとったのです。結果は二試合ともブルドーザー谷川の本領発揮でした。

岩永姉が県予選終了後に足の痛みを訴えました。診ると脛骨の疲労骨折でした。一ヶ月半は休養が必要でしょう。彼女は県予選終了後からずっと自主トレをさせています。でも、フルタイムではありませんが大分では試合に出します。一時的に試合に出たからといって復帰が著しく遅れるとか傷が著しく悪化するという性質のものではありませんから。試合後また休養と自主トレを続けさせます。

清水はまだチーム練習には参加させていませんが、大分では県予選の時よりもプレイタイムが長くなると思っています。彼女がコートにいるとゲームが落ち着きます。興奮状態の谷川や二宮、パニック状態の立川や林田を落ち着かせる鎮静剤として欠かせません。

全体としては、観客から入場料を取ってもいい試合をするかと思えば、観ているのが気の毒になるような試合を時々します。冬休み合宿のすばらしい出来を評して、県予選の案内文書に「こんなすばらしい彼女たちに、ゆめ総体の舞台で悔し涙を流させるようであれば、私は切腹しなければならぬと思っています」と書きましたが、ほんとにそんなチームになるためには少し工事期間を延長しなければならぬようです。

【結果報告】清水（半月板損傷リハ中）

一ヶ月前、この大会の県予選報告書に「私の目の前で戦っているチームは冬休み合宿のクレインズとはまったく違うチームでした」と書きましたが、冬休み合宿のクレインズは今回も登場してくれませんでした。冬休み合宿のクレインズなら九州大会での優勝はもちろん、全国上位を狙いますと誰はばかりことなく言うチームだったので…

冬休み合宿中のできばえの見極めを私が間違っていたのかというところではありません。選手一人ひとりの心の奥底に根強く残っている弱点が是正されていないことはよくわかっていきますし、それがゆめ総体までに改善されるのは難しいということもわかっています。しかし、プレイの組み立て方や人の動かし方によって弱点だらけの人間の集まりでもこんなすばらしい仕事ができるんだという作品が冬休み合宿では次々と生み出されたんです。それはそれはすばらしいものでした。それがなぜ…？

県予選終了後の報告書に私は

それが体験として自分の身体の細胞の一つひとつに染み込んでいないからだと思います。体験は回数を重ねれば自分のものになるものではありません。「よしわかった」「やってみよう」「なるほど」で積み重ねられた体験は結果の成否にかかわらず財産として蓄積されていきますが、の間に「大丈夫かなあ」「ほんとにいいの？」というような思いが割り込んでくるといくら体験を重ねてもそれは財産として蓄積されないのです

と書きましたが、そんな評論家みたいなことを言っていてゆめ総体に間に合うのか？と、今は焦りが私のアタマを占領しています。正直言って苦しいです。不安に押しつぶされそうです。が、苦しがるのが不安だろ？が前へ進むしかありません。

このあと、主な行事は二月二日から二三日まで宗像で行われるU十八エンデバー計画の九州ブロック強化練習会に指名された立川・谷川・林田の三名が参加します。三月十五・十六は県内の強化事業で国体三回合宿があります。三月二一日から二三日は鹿児島招待。その後関東遠征と続きます。

次年度の獲得選手を紹介します。杉野（一六八cm熊本桜木）高岡（一六八cm長崎長与第二）森重（一六四cm長崎式見）ジャトウ（一八四cmセネガル）以上四人です。

アメリカから選手をリクルートしようとしていた話は結局頓挫し、OSGの中村和雄氏の紹介によるセネガルからの留学生を取ることになった。前にも説明したがOSGには外人が二人居るが、いずれもアメリカの大学でプレイをした選手だが母国はセネガルなのだ。そこからの話でこうなった。

現地セネガルでプロモートしたのはアッサン・バジという、セネガルから外国にバスケット留学をしたい選手の窓口となっているセネガルバスケットボールアカデミーのコーチだった。その話を聞いた日本国内の高校から「うちにも欲しい」と手が挙がった。宮崎の延岡学園男子一人、福岡第一高校男子二人、熊本慶誠高校女子一人だった。中村氏はこの話をセネガル側にも伝えた。その時彼はアッサン・バジに「鶴鳴に一番いい選手を寄せよ」と念を押した。

セネガルの学校はアメリカと同じで九月が新学期なので日本と半年ずれる。だから、ジャトウは日本では一年生の途中に十七歳になるが、生まれ月が十一月なので、当時のルールでは三年間インターハイ・国体・ウィンターカップに出場するのに何の問題もなかった。

彼女たちは三月下旬成田空港に着いた。アッサン・バジが同伴していた。鶴鳴も慶誠も柏市のジャパンエナジーで合宿していたのでジャトウとラマはそのままその合宿に合流してもらった。アッサン・バジもその合宿に合流した。留学生五人の渡航費は既に各校から送金していたが、アッサン・バジが五人の留学斡旋のために使った経費(例えば国際電話代・各自の家からダカール空港までの交通費など)と留学斡旋の謝礼として私が一〇万円払った。これはその後各校に連絡して割り勘で支払ってもらったが、その時私は各学校に次の提言をした。

留学生の待遇は特待生(授業料と寮費免除)とし、月々二万円のお小遣いを与える。その二万円は日常生活に必要な物品の購入に充て、バスケット用品などは学校から支給する。

留学生は毎年二月中旬から三月中旬に帰省させ、その渡航費用は学校で持つ。

月一回は学校から国際電話で自宅と話しをさせる。一通話五分以内とする。

携帯電話は持たせない。

国内のプロモートでお世話になった中村和雄氏には謝礼はしない。恩返しはチームを強くすること。

以上、各学校の待遇や条件を統一しておかないと、留学生が互いに連絡を取り合った時に待遇の違いがあればいろいろ不都合が起ころうと思っただからである。

そうして春休み合宿から合流した二人の初日はさんざんだった。長旅の疲れと時差ボケでそれは仕方がない。日が経つうちにそれも改善されたが、どうしても腑に落ちないことがあった。中村氏はアッサン・バジに「鶴鳴に一番いいのを寄せよ」と言っただけなのにどうみても慶誠のラマのほうがいいのである。

エナジー合宿中に中村氏は電話で「どうだジャトウは」と私に聞いた。私は「ウーン、ちょっと時間がかりますね」と言った。その時彼は「まあたまたまお前はもったいぶって」と言っただけだったが、その時点で中村氏はアッサン・バジが一番いいのを鶴鳴に寄せたと思っただけなのである。

このことは後に明らかになる。五月に熊本慶誠に鶴鳴は遠征をした。その時中村氏が二人を視察に来た。鶴鳴と慶誠のスクリーンを観ながら中村氏は「ラマってのはすごいね」と言った。そして「ごめん、がんばって育ててよ」と言った。

中村氏はこのあとアッサン・バジに国際電話で文句を言ったそうである。しかしアッサン・バジは「いや、ジャトウの方がラマよりいいはずだ。俺は鶴鳴に一番いいのを寄せた」と言い張って譲らなかつたという。この話の後に「鶴鳴と慶誠は成田空港で選手を取り違えたらしい」というデマになって日本全国に飛んだ。ちゃんとパスポートを持って入国するのだからそんなことがあるはずはない。

ラマはすぐかった。慶誠卒業後カリフォルニア大学バークレー校に進学し、ずっとスタメンだった。彼女が大学三年生の時に私はカリフォルニア大学バークレー校で行われたワシントン州立大学とカリフォルニア

大学バークレー校男子の試合を観に行ったが、男子がホームゲームの時は女子はアウェイゲームらしく、ラマには会えなかった。しかも、その直後にラマは前十字靱帯を切って一シーズン棒に振った。

春休み合宿に話を戻そう。

チームは柏で合宿した後マイクロバスで東名・名神を走って徳島に向かい、城北高校で合宿する。それがこのところの定番になっていた。かなりの強行軍である。その間ジャトウは寒い寒い連発。そりゃそうだろ。赤道直下のセネガルから三月下旬の日本に来たのだから寒いはずだ。ジャトウのために毎日電気ストーブを借りてベンチや更衣室に置いてやった。

このようにプレイ以外のことでジャトウにはずいぶん振り回された。まず食事だ。イスラム教だから豚肉は食べない。だから毎回豚肉の入っていない食事を与えなければならぬ。普段は考えたことがなかったが豚肉の入っていない食事を提供するとほんとに種類に限られる。ラーメンなんか絶対ダメ。チャーシューを入れなくてもスープそのものが豚骨スープだからダメなのだ。それに加えてジャトウは野菜が嫌いなので食べるものが限られる。

ミーティングをしようとするとジャトウがいない。どうしたのか聞くと部屋でイスラムのお祈りをしているという。本当は誰もいないところでやるらしいが、合宿の宿舎は相部屋だから仕切りのカーテンを引いてその向こうでお祈りをしているそうだ。お祈り中は「ジャトウ、ミーティングが始まるよ」と呼びかけにくい雰囲気らしい。だがそれも後に「ミーティングが先だよ。ここは日本だ!」と私は言うようになった。約一〇日間の遠征後、ジャトウは自分がこれから暮らす長崎に到着した。学校の先生方も寮生も大歓迎でジャトウは可愛がられた。

が、長崎に帰って二日目に大事件が起きた。ジャトウが体育館の洗濯機と乾燥機が並べられたスペースの床に倒れてもがき苦しんでいるのである。「どうした!」と聞くとジャトウはのたうちながら洗濯機の上に置いてあるペットボトルを指さす。

そのペットボトルにはお茶のラベルを剥がされて透明の液体が入れてあった。そして黒のマジックインキで漂白剤と書いてあった。マネージャーが洗濯物に入れる漂白剤をそこに置いていたのだ。ジャトウは遠征の途中で弁当を食べる時は日本のお茶は飲めないからミネラルウォーターを飲ませていた。ジャトウは黒マジックで書いた漢字は読めない。てっきりいつも弁当を食べる時に飲んでいたミネラルウォーターだと思って飲んだのだ。

私はすぐジャトウの口に指を突っ込んで吐かせた。水をがぶがぶ飲ませながらそれを何度も繰り返した。そしてすぐ携帯電話で十善会病院の救急外来に電話をかけ、学校の軽ワゴン車に乗せて病院に向かった。救急外来にはもう医師が待機してくれていた。私は漂白剤を差し出し「これを飲んだんです」と言った。医師が「その後どんな処置をされましたか?」と聞いたので、水をがぶがぶ飲ませながら指を突っ込んで何回も吐かせたことを告げた。医師は「そうですか、それならもうこれ以上の処置は要りませんね。しばらく安静が必要でしょうが」と言い、カルテに何か書いていた。

ジャトウはその日に寮に帰り、二日間静養したあとは練習に参加できるようになり、そのあと行われた県春季選手権大会にも出場できた。私はジャトウが漂白剤を飲んだと分かった瞬間「ジャトウの留学を棒に振らせた!」と思ったが何事もなく復帰できてホッとした。

三 本番

【春休み遠征】

三月二三日から二六日まで鹿児島遠征をした。

私たちの仲間でも強化試合はほとんどが一〇分 二分 一〇分の計二〇分を一本として、最初の一〇分を第一ピリオド扱い、二分休憩後の一〇分は第四ピリオド扱いとする。この時の春休み遠征は通常の二〇分

ゲームだったり、四〇分のフルゲームだったり、一〇分だけのゲームだったりいろいろあった。対戦チームは、鹿児島・神村学園・鹿児島女子・鹿児島東・鹿児島中央・鹿児島選抜の計六チーム。対戦成績は一〇勝〇敗だった。

三月二七日から三月三〇日までは千葉県柏市のジャパンエナジーでの合宿だ。

対戦チームは新潟中央・熊本慶誠・昭和学院・東亜学園・倉敷翠松・京都明德・市立柏の七チーム。対戦成績は十二勝〇杯だった。この合宿途中に合流参加したジャトウは、成田空港着の翌日三月二八日に二分だけ試合に出してみたがまったくダメだったので、少し指導してから最後の二日間だけ使ってみた。倉敷翠松戦では四〇分中八分使った。得点は三点だった。最終戦の市立柏戦では四〇分中九分出場させた。得点は四点だった。

三月三一日は東名名神を走って徳島まで移動し、四月一日から五日まで城北高校で合宿した。

対戦チームは徳島城北・福井商業・倉敷翠松・広島県商・札幌創成・神村学園・愛媛済美・岐阜女子の八チーム。対戦成績は十六勝一敗（神村学園一点差）二引き分け（二試合とも岐阜女子）だった。城北合宿でのジャトウは相変わらず寒がってはいたが時差ボケもとれ、少し身体が動くようになってきたので十九試合中十六試合に使った。しかしフルタイム出場は無理で、常に八分から一〇分の出場時間だった。

三月下旬からの遠征では、岐阜女子の中国人留学生二人（一九〇cmと一八八cm）・市立柏の中国人留学生（一九〇cm）彼女はバスケット留学ではなく学問留学）・神村学園の中国人留学生（一七五cm）に鶴鳴のジャトウと、留学生が五人も居た。

この合宿中にジャトウの中身が少し見えてきた。まず、ゴール近辺のシュートをよく落とす。それは、成田からエナジー合宿に合流した直後にわかったことだが、原因はシュートの際ボールが手に乗らなくてスナップの利かないすっぽ抜けたシュートであることと、バックボールを使うシュートがまったくできないからだった。徳島合宿で少しずつ試合に出場させるようになってから見えてきたのが、相手に速攻を出されても急いでディフェンスに戻らないことだった。前者は技術的な問題で後者は人間性の問題。後者を改善するのはやっぱりだ。

後者が表面化したのが漂白剤事件後、練習に参加できるようになってしばらく経った頃だった。ジャトウが「練習時間が長すぎる。週末は休みにしてくれ」と言い出した。私はセネガルの実情を聞いた。まず教育事情。学期が日本と半年ずれるが、中学生までは義務制で、大学までの学年は六・四・三・四である。まず驚いたのが、ジャトウが「私はちゃんと中学を出るからこうして高校に行けるし外国留学もできるが、中学に行けない子で私よりすごいバスケットボール選手がセネガルにはたくさん居る」と言ったことだった。そこで私はセネガルの教育事情をインターネットで調べた。

小学校は六歳から十一歳（就学率は九二・五％。うち卒業児童六〇・八％）

中学校は十二歳から十六歳（就学率は小学校卒業児童の五九・五％。うち卒業児童が何％かは不明）

ということは、義務教育対象児童の三三・五％しか中学教育を受けないのである。理由は貧困だ。こどもが働いて稼がなければ食っていけないのである。私は続けてジャトウに学校生活のことについて聞いた。ジャトウの説明によれば、朝から三時間授業を受けて昼休みは全員自宅に帰るのだそうである。もちろん給食はない。午後の授業は三時過ぎに始まる。昼間の暑い時間はみんな家で休むのだ。午後の授業が終わると部活動をするが、体育館のある学校はほとんどなく、校庭のコンクリート（たぶんリリウム張り？）コートで練習する。

練習は夕方から始めるし、照明施設などないので日暮れ前には終わる。「雨の日はどうする?」と聞いたらジャトウはクビを横に振った。雨の日は練習しないのだ。ということは、アフリカは雨期と乾期があるので雨期はほとんど練習しないということになる。鶴鳴の練習は出来が悪くても絶対三時間以上はしないことにしているが、夕暮れまでのわずかな時間しか練習しなくて雨期にはほとんど練習しなかったジャトウとって鶴鳴の練習、というより日本の練習は長過ぎるのだろう。

平成十五年四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 立川 谷川 二宮 岩永姉 ジャトウ

【案内文書】

三月末から四月初旬までは強行スケジュールで長期遠征をしましたが、この遠征では大きな収穫が二つありました。昨年九月以降上昇し続けていた立川が二月頃からずっと低空飛行でしたが、徳島遠征でまた上昇気流を捕らえました。これがひとつ目です。ふたつ目は成井が完全に主力ローテーション入りを果たしたことです。成井は、筋力は男性なみの凄い素質を持ってはいますがなかなかそれが活かせませんでした。昨年は背伸びをしないでいぶん苦しい思いをしたようですが、今は悟りの境地。自分なりの役立ち方を会得したようで、ゆめ総体には欠かせない存在になりました。春休み合宿の途中で合流したジャトウのことについては追々述べていきます。

【結果報告】 林田（鷲足炎り八中）清水（半月板術後八中）ジャトウ（初日捻挫）高岡（腸腰筋損傷）

最終日の準決勝戦までは終始落ち着きのない試合でした。選手たちだけでなく私もそうでした。震源地はジャトウです。彼女の得意なブレイは何か。誰もがそれを理解してやろうとして気を使い、自分を見失っていました。コート上だけでなく日常生活でもそうでした。食事は大丈夫か、ストレスが溜まっていないか等々みんなジャトウに気を使い、見かけは和気藹々ですが中身はよそ行き姿。自分らしさをみんな閉じこめていました。

それも、ジャトウが本領を發揮して暴れてくれたら吹き飛んでしまうのですが、そのジャトウがまるでダメ。春休み合宿から合流して約三週間、時折見せるナイスパスや強烈リバウンド、瞬間見せるダイナミックな動きはすごい素質を感じさせるのですが、高さでは絶対有利なはずのゴール近辺のシュートをことごとく落とすのです。これには私も選手たちも悩みました。春休み合宿からその弱点に気付いていた私はジャトウスペシャルメニューを作って毎日練習させました。ジャトウは利口なので練習はすぐマスターします。しかし試合になるとまったく入らないのです。それでジャトウも落ち込み、準決勝戦後泣いていたそうです。

決勝戦のスタメンは立川・谷川・林田・二宮・岩永姉でいくとマネージャーに伝えていましたが、準決勝戦後ずっと考え続けていた私は男子の準決勝戦が終わる直前に放送席に行き、スタメンの林田をジャトウに替えると告げました。そして決勝戦の前の練習の時にジャトウを隣りのコートに連れて行き、こう言いました。「決勝戦はスタメンだぞ。ところで、ゴールから四、五メートル離れたお前のシュートはとても巧いがゴール下のシュートがダメだ。それはゴールしたのシュートも外角シュートと同じようにアーチがありすぎるからだと思う。ゴール下でお前を邪魔できるヤツは居ないんだから、フワツと投げずに腕を伸ばしてバックポールのにたたくつけるようなシュートをした方がいいよ」

決勝戦。ジャトウの最初のゴールは、谷川のドライブの逆サイドから飛び込んで谷川からのアシストパスを受けて打ったシュートでした。それまでは一〇本中八本は落とすであろうと思われるシュートをドンパシヤツ（ドンはボードに当たる音。パシヤツはネットの音）という音をたてて入ったのです。それからのジャトウのシュートは落ちませんでした。

一言のアドバイスでフォームが変わるはずがありませんから「スタメンだぞ」と言われたことばが励みになり、こういう結果につながったのだと思います。ともあれ、ジャトウ来日以来ジャトウ本人も私も選手たちも悩み続けましたが、今日初めてジャトウの愛想笑いではない本当の笑顔を見ることができました。

備考 ジャトウの結果 二回戦二〇分十二点（途中捻挫）・三回戦〇分〇点・四回戦一〇分七点・準決勝四分二点・決勝十四分十四点。

【福岡遠征と倉敷遠征】

四月下旬に福岡遠征をした。場所は九州女子高校。参加チームは九州女子・神村学園・鶴鳴の三チーム。神村学園は二日目から合流したので初日は九州女子と鶴鳴だけ。二〇分のスクリーンを六本やり、三勝三

敗だった。ジャトウの出場時間と得点は、十三分四点・十七分六点・二十分八点・十八分一点・〇分〇点・〇分〇点だった。

二日目からは三チームで一〇分ゲームを十二本やった。神村に二敗、九州女子に二敗した。ジャトウの出場時間と得点は、一〇分二点・七分九点・四分四点・一〇分四点・三分五点・一〇分〇点・四分八点・七分四点・六分七点・一分三点・三分六点・五分七点だった。

初日の夕方、福岡第一高校の男子セネガル留学生二人が自分たちの練習が終わったあとジャトウを慰問に来てくれた。私と池田先生が合宿所の下を通りかかるとセネガル人三人が何やら話をしている。現地のワラフ語だから何を言っているのかわからない。横を通り過ぎようとすると福岡第一高校の留学生の一人が私に近付いてきて身振り手振りで「ジャトウがセネガルの自宅に電話したいと言っている」と伝えた。チラッと見るとジャトウは泣いているようだ。私は両手を広げて肩をすぼめ、無視して通り過ぎた。

実は、初日の試合の途中に私はジャトウをこっぴどく叱ったのだ。試合中にジャトウがコートの中から私に「交替させてくれ」というサインを送ったからである。それまでの私はジャトウの要求をすべて受け入れてきた。しかし、この時はもう堪忍袋の緒が切れた。

タイムアウトの時私は「コート上では誰よりも動きが遅く！しかもゴール下のシュートはことごとく落とす！そのくせうまくいかなければすぐ交替させてくれと言っし、ストレスが溜まるから週末は休みにしてくれと言っ！自分がただ役だけ役に立っているかわかっているのか！お前に自分の弱点を治そうとする態度があれば、週三日しか練習しなくても週末は毎週休みにしてやってもかまわん！もっと自分を知れ！」と怒鳴りつけた。

五月の連休は毎年倉敷遠征だ。参加チームは、倉敷翠松・福井商業・宮崎小林・宇部慶進・徳島城北・鶴鳴の六チームだ。二日半で二〇分ゲームを十二本。十一勝一敗（福井商業）だった。ジャトウの出場時間と得点は、福商戦二〇分十一點・小林戦十三分二五點・翠松戦十三分十二點・慶進戦十八分十二點・城北戦八分四点・慶進戦六分四点・翠松戦十三分十三點・城北戦十五分二點・小林戦四分〇點・福商戦一二分八点・城北戦一七分二點・一三分六点だった。

この時もジャトウは私から叱られっぱなしだった。「人の話を聞く時は下を向くな。顔を上げて聞け」「俺が話をしている間は水を飲むな」などなど。

オフエンスリバウンドを失敗して相手に速攻を出されてもディフェンスに戻るのが遅い。「お前はいつもディフェンスへの戻りが遅い。相手ボールになったら全力で走ってディフェンスに戻れ」と言ったらいいわけをした。「敵の五番の選手をだれもマークしていないかったのでヘルプに行きました」「ナニイ！お前がディフェンスに戻らないからその間アルは自分のマークマンの五番とお前のマークマンを両方守っていたんだ！」と怒鳴りつけた。

福岡遠征で叱られたくせにまたコート上から「交替させてくれ」というサインを送ってきた。私はタイムアウトの時に「いいか！選手交代は監督の俺が決める！お前が決めることではない！」と、ジャトウのおでこすれすれに私のおでこを近づけながら言った。それ以後ジャトウはコート上から「交替させてくれ」のサインは送ってこなくなった。

【熊本遠征 五月十一日は日帰り・二四と二五は泊まりがけ】

十一日は一〇分ゲームを七本やり、七戦全勝だった。ジャトウの出場時間と得点は、一〇分七点・六分四点・七分二点・八分三点・一〇分六点・五分二点・七分二点だった。

二四日と二五日は一〇分ゲームを十二本やり、十一勝一敗だった。ジャトウの出場時間と得点は、七分二点・六分六点・七分七点・五分四点・一〇分二点・二分〇点・九分八点・九分三点・九分二点・八分五点・七分四点だった。

この遠征の目的は二つある。ひとつはセネガル人留学生のストレス解消のためだ。母国語で話せるのは何

にも勝るストレス解消法になる。ふたつ目は、慶誠高校のチームにはラマの練習相手になるような選手がいないので、ラマの練習相手をしてやるためだ。前にも述べたがこの時村和雄氏が慶誠に視察に来た。

誰が見てもジャトウとラマではラマが数段格上だ。しかしこの強化試合ではジャトウも鶴鳴では見せない表情でラマに立ち向かっていく。ラマもライバル意識むき出した。このあと三年間、ジャトウがこの表情で日頃の練習や試合をやってくれることを願わずにはいらなかった。

セネガルの母国語について話をしよう。セネガル人の種族でもっとも多いのはワラフ族で、背が高い人が多い種族だと言われている。現地人同士の会話はワラフ語といって、アフリカの言語の特徴である舌を上顎にくっつけて離す破裂音の多い言葉である。

セネガルはフランスの植民地だったので公用語はフランス語だ。だから学校の授業はフランス語で行われるが、ジャトウは英語が分かる。「お前なぜ英語が分かるの？」と聞いたら返ってきた返事が「英語の授業を受けたから」だった。日本の中学生で英語の授業を受けただけで英語が話せるようになる生徒はいない。ジャトウは頭がいいのだ。だからジャトウが日本語で会話ができるようにするまでは私も英語で対応した。時々電子辞書を引きながらやったが、怒鳴りつけたりするときは電子辞書など使わない。しかし、怒鳴りつけるときは電子辞書などなくても機関銃のように憎らしいことばが次々と出る。不思議なものだ。

「お前のお父さんはどんな仕事をしているんだ？」と聞いたら「お医者さん」と言った。「医師になる勉強はどこでやったんだ？」と聞いたら「フランスの医科大学です」と言った。そんな血筋を引いているからジャトウは頭がいいはずだ。予断になるが、ジャトウのお父さんは奥さんが四人いて、ジャトウは第一婦人のことでもある。ジャトウには腹違いの兄弟姉妹がごろごろ居るのだ。

熊本遠征はセネガル人留学生のストレス解消が主目的だったが、学校内でも私は非常勤講師のALTに頼んで週一回カウンセリングをしてもらった。ALTのタッド・サンダース先生はアメリカ人でアリゾナ大学を卒業したあとフランスのソルボンヌ大学に留学した経験があるのでフランス語が話せる。渡りに舟とはこのことだ。

タッド先生は私に何回かのカウンセリングのあと「ジャトウ マウントストレス」と言った。県外から入学したのではなく、言葉がまったく通じない外国から、しかもまったく前例のない国からの留学なので国内では、日本人の習慣や気質や、さまざまな事例の対処の仕方を教えてくれる人は皆無である。マウントストレスなのはよくわかる。

タッド先生以外にも私は時々電話で話相手になってくれる人を探し出した。私が桜馬場中学校の教師をしていた頃のバスケット部員の弟さんがフランスに渡ってお菓子職人として修行を積み、帰国して長崎の繁華街にリトルエンジェルズという洋菓子の店を出している。その奥さんがフランス人なのだ。私は事情を話して時々話し相手になって貰うよう頼んだ。

そうやって、ジャトウの思いが私にもどうにか伝わるようになってからやるとわかったのがシャンプーの件だった。来日してすぐのエナジー合宿中にジャトウに「何か欲しいものはあるか？」と聞いたら即座に「シャンプー」と言った。そんなの簡単だ。ジャトウをすぐドラッグストアに連れて行ったがどのシャンプーを見てもジャトウは頭を横に振る。

アフリカ人の髪は縮れている。髪を長くする女性はそれを細い三つ編みにして何本もぶら下げる。その作業にシャンプーが要るのだ。シャンプーといっても彼女たちが使うシャンプーは日本で使うシャンプーとはまったく違うイメージで、分かり易い事例で言えば相撲の鬘を結う時に使う椿油と思えばよい。私たちはシャンプーと言えば髪を洗う時に使うものだが、彼女たちは髪を頻繁に洗わないのである。特性のシャンプー（椿油）を付けて髪の手入れをするのだ。そんなの日本のどこにも売っていない。今ではそれをどうしたか覚えていないが、インターネットで見つけて注文したような気もする。一旦帰国して再来日した時は彼女たちは大量に母国からそれを持ってくるようになった。

合宿報告書より

ラマとジャトウのことについて少し話をしましょう。ラマ（一八九cm）は首都ダカールの高校、ジャトウ（一八四cm）はダカールから七〇km離れたチエス（セネガル第二の都市）という町の高校出身です。セネガルは一〇のリジョン（地域）に分かれていて、単一高校で戦う大会はリジョン内のチャンピオンを決める大会だけです。単一高校が一同に会して戦う全国大会はありません。ラマの高校もジャトウの高校もそれぞれのリジョンではチャンピオンです。

では、高校の全国大会は行われないのかというとそうではなく、日本で言えば国体方式、つまり各リジョン内の優秀選手を十二名選んでリジョン代表チームを作り、リジョン対抗の全国大会をやるのです。その大会でラマのリジョンは優勝、ジャトウのリジョンは三位でした。二人とも一年生ながら各リジョンの中心選手で活躍したのがアッサン・バジ（セネガルバスケットボールアカデミーのコーチ）の目に止まり、日本への留学の話を持ちかけられたわけです。

今、二人とも日本語を猛勉強中です。鶴鳴ではジャトウのために特別カリキュラムを組み、音楽や体育などの実技科目や数学はクラスメートと一緒に自教室で授業を受けますが、世界史や生物など日本語の語学力が身に付かなければ理解できないような科目は、専門の教師を付けた日本語学習とそれを自学自習で補う時間とに分けて日本語学習の特訓をしています。

自学自習の時間は体育教官室で習ったアイウエオやフレーズの練習をしたり、私のパソコンを使ってインターネットでセネガルニュースを見たり、母国の音楽を聞いたり、友達にEメールをしたり、時々疲れて居眠りをしたりしています。自学自習の時間はまた、ジャトウが私にゆっくり質問をする時間としても重要な位置を占めています。

平成十五年六月 県下高校総体 優勝 スタメン 立川 谷川 林田 二宮 ジャトウ

【案内文書】

遠征の翌日はジャトウを公欠で休みにしてやります。休み明けの五月八日（木）は一校時・二校時とも自学自習の時間。いつもは体育教官室でパソコンをいじったりひらがなの練習をしています。この日は体育教官室に入って来るなり、「先生いくつか聞きたいことがある」と言い出しました。一校時は保健の授業だったので二校時に話を聞いてやりました。

質問は次のような内容でした。

食事はどんなことに気をつけたらいいか。

検尿で白血球が混じっていたので再検査と言われたが、私の病気は何なのか。

私は巧くなってきているのか巧くなっていないのか。

私は次のように回答しました。

食事の好き嫌いが多すぎ。特に野菜をちゃんと食べなければならぬ。

乳糜尿（にゅうびによう）といって、リンパ液が尿に混じった時に起こる場合がある。大半の原因が寄生虫だ。心配なら検便をした方がいいな（結果的に異常なしでした）。

巧くなっている。心配するな。俺もお前の使い方がだいぶ分かってきた。だから、これからはもっと巧くなるぞ。

そして、その日の午後の練習は私のバスケットに対する考え方とその考えをもとにした動きを丁寧に説明しました。来日から四〇日。まだまだ甘いところがたくさんありますが、この二日間でジャトウとの距離が少し縮まったような気がします。

毎年、県高校総体は体育館のステージで推戴式があるし、試合には一般の生徒がたくさん応援に来るので三年生主体で舞台に立たせませす。いつもは県高校総体を突破したら九州大会やインターハイは実力本位で行きます。しかし、今年はインターハイが諫早市で行われるので、これも三年間苦楽を共にした上級生を晴れ

舞台上に立たせてやりたいと思います。エントリーから外れた一年生や二年生は九州大会や国体で思い切り暴れてもらいますのでツメを研いでその日のための準備をしておいてください。

【結果報告】林田（初日大腿部打撲）清水（半月板術後リハ中）ジャトウ（貧血発覚）

五月十五日の朝にこの大会の案内文書を発送しました。その日の午後の一対一の特訓中にジャトウは足がもつれて転倒し、足首を捻挫しました。たいした捻挫ではないのですが、なかなかうまくいかないのとバテてきたのでなかなか起きあがるうとしません。林田が助け起こそうとしたので私は「ほっとけ！ジャトウ自分で立て！」と言って知らん顔をしていました。

ジャトウは言われてすぐ立ち上がりはしたものの動こうとはしません。私はプイとジャトウに背を向けて反対側でゾーンオフENSEの練習をしている他の選手の方を見ていたらしばらくして一対一が始まりました。翌日はビッコを引いていたので休ませました。翌々日の十八日（日）は医学測定です。ジャトウは全ての項目を測定しました。ということは、ジャトウの捻挫はやっぱりたいしたことなかったんです。

腹が立って腹が立って、私はプレイ上の注意以外は一切ジャトウと口をききませんでした。するとそれから二三日経ってカウンセラーのタッド先生が「ジャトウ オチコンデルヨ」と言いました。私は「どんなに落ち込んでいても俺は決して妥協しないよ」と言いました。

五月二二日。医学測定の結果を宮本医師から電話で知らされました。ジャトウは予想通り貧血でした。この日すぐ病院に連れて行きました。治療は五回ほど通院して鉄剤の注射を打ち、その後は錠剤を飲んで治していくことになりました。病院から帰ってきたあとしつかり話をしました。

宗教上食べてはならないブタ肉以外の日本食は何でも食べる。食べ物に好き嫌いが多いヤツはスポーツ選手失格だ。

プレイはドライブを多用しろ。お前の良さを引き出すにはそれを武器にするのがよい。

ゴール下のシュートのまずさは時間を掛けて直していくしかない。

いろんな話をしましたが、大きなポイントはこの三つです。ジャトウは肝心なことばはメモしながら本気で聞いていました。

その後、次第に調子を上げてきたジャトウは二七日は来日以来最高の出来。翌二八日も前日に劣らないくらいに出来でした。食事とバスケットで手のかかるジャトウの面倒を見るのはものすごいエネルギーを要します。私も結構参っています。寮生はもっと大変だと思います。来日以来ジャトウの付き人みたいにしてきた気疲れからだと思えますが、主将の立川はこのところずっと精彩を欠き、林田もリズムを崩し、谷川と二宮も調子を落としています。

が、二七・二八の二日間のジャトウの出来の良さでみんな元気を取り戻しました。極めつけは大会二日目のジャトウの出来です。「いいわけばかりしていたあのジャトウが？今年一年は無理かなと思っていたあいつが？」と、我が目を疑いたくなるほど真剣にやっているのです。最大の弱点であるオフバランスショットはまだ再々顔を出しますが、仲間を助ける仕事をしてくれるのです。ところが最終日の決勝戦、今度はジャトウ以外の選手たちが高校総体症候群に冒されてしまいました。笛や太鼓に踊らされて浮ついたバスケットをしてしまったのです。残念！

平成十五年六月 九州高校総体 優勝 スタメン 立川 谷川 林田 二宮 ジャトウ

【案内文書】

六月十二日から十八日まで、ハワイのHOOPS・IMUA（イムア）という男子ミニバスチームを招待して長崎のミニバスチームと交流試合をさせました。長崎のミニバスでは歯が立たず、最後の方は市内でも強い中学生チームと対戦させましたが互角でした。その強さにも驚いたのですがIMUAの選手たちの熱心に驚きました。

十三日と十四日の両日は本校第二体育館の宿泊施設に泊めました。十三日は午前中にちょっとだけ市内観

光をさせました。その後街で夕食を済ませて宿泊所には夜の八時頃帰ってきました。I M U Aの選手たちは宿舎に入るなり食堂に備えてあるテレビを指さして「山崎コーチ、テレビは映りますか？」と聞き、部屋では寝るだけでなく何か楽しめるものがあるかどうか気にしていたくせに、部屋に荷物を置いたらテレビには見向きもせずまた体育館に行つて個人練習を始めたのです。

終わつたのが夜の十一時。コーチから強制されて練習しているではありません。翌日も同じ。この日は午後一時から六時まで市内の七チームを鶴鳴に招待してのジャンボリー（JUMBORREE）。それから街に食事に行つて戻ってきたのが八時半。戻るやいなやまた体育館の電気を付けて練習です。I M U Aは男子のチームですがひとりだけダイアナ（DIANNA）がひとつ多いのは間違いではありません」という女の子が混じっています。この選手がすごいんです。

昨日同様みんな体育館に出て自主練を始めました。男の子たちは途中でバドミントンをして遊んだりまたバスケットの練習をしたりしていましたが、ダイアナだけは目をランランと輝かせてシューティングをしています。時計の針が十一時を回つた頃にコーチが体育館に顔を出して「おい、もういいかげんにしてシャワーを浴びて寝ろ」と言ったところでようやく終了。その熱心さとひたむきさに参りました。「九州大会直前にボランティアで小学生の世話までして大丈夫か？」という人もいましたが、おつりがくるくらい勉強になりました。

試合が落ち着くのは清水がコートに居る時。しかし、清水はフルタイム出場はまだ難しい。

立川と林田は出だしスムーズなら順風満帆。しかし、出だしにつまづくと軌道修正に時間がかかる。

谷川のエンジンが快調ならベンチ采配は不要。しかし、前半快晴でも後半土砂降り有り。予測不能。

二宮の攻撃意欲はしばしば相手を粉砕。しかし、自分しか見えない場面が時々出るので交替が難しい。

ジャトウはよくなりました。しかし、彼女がゴール下でシュートする時は目をつぶりたくなるという状況は変わりません。今のところジャトウを改修するより、私とその被害を最小限に抑える采配ができるかどうか力がぎです。私にもその結末の予測はできません。

【結果報告】

決勝戦が終わつた後ドーツと疲れが出て、試合直後のインタビューの後は表彰式が終わるまでマイクロバスの中でずっと寝てました。でも熟睡はできないんです。うつらうつらしてハツと目が醒め、いろんなことを思っている内にまたうつらうつらの繰り返しでした。とにかく疲れました。今の心境は、九州大会で優勝したという喜びよりもインターハイ開催県の代表として第二シードのポジションを獲得できたという安堵感以外なにもありません。

大会プログラムを見た時、開催県のチームがどこに在るだろうと捜すのと、見た瞬間に四隅のシードポジションに在るとわかるのでは全然重みが違います。これも、前年度中村学園がインターハイとウィンターカップとともに準優勝という好成绩を収めてくれたからこそ九州チャンピオンのチームが今年のシード権を得られたわけで、心から中村学園には感謝しています。

そして、次年度はこれをしっかりバトンタッチしていかなければならない（もちろん鶴鳴が引き継ぐつもりですが）という重圧もズシツとのしかかっています。

長崎の県総体後、ずっと私は怒りまくっていました。その怒りは九州大会まで持ち込みました。一昨年の九州国体のハーftimeに花田の首を締めながら怒鳴りつけたのが記憶に残っていますが、私は基本的に練習では怒つても試合では決して怒らないようにしています。が、今度の大会では久しぶりに選手をのしり続けました。一番ひどかったのは決勝戦の第三ピリオドにジャトウをベンチに下げて怒鳴りつけた時です。

「キサマ何度言えばわかるんだ！ 今日だけはドリブルするな！ パスアンドゴー、それだけやれ！ それを何回言つたか！ 何だ？ その不満そうな顔は？ 不服があるなら今すぐベンチから出て行け！」 遠いアフリカの西の果てから親元を離れて一人で出てきてまだ三ヶ月。日本語はあいさつ程度しか話せない十六歳の女の子を捕まえて言うセリフではありません。

しかし、日常のジャトウの甘ったれた性格に堪忍袋の緒が切れていたことと、他の選手たちにも「お前たちは強くなった。それなのにどうして小さな事件やちよつとしたミスでうるたえるんだ？どうしてそれがいつまでも尾を引くんのだ？」という思いがもう限界に達し、これで潰れてしまうならそれでいいと思ってあらゆる罵声を浴びせました。

私は時々自分の意地悪さがおぞましくなり「もしかしたら俺はいつかこの子たちに刺し殺されるかもしれないなあ」などと思うことがあります。しかし、九州大会優勝がバネになって自信がつき、インターハイ優勝という結果に結びつくようなことになれば、選手に殺されようが袋だたきに会おうが私は一向にかまいません。

平成十五年八月 インターハイ 三位 スタメン 立川 谷川 林田 二宮 ジャトウ

【事前合宿】

平成十一年度の熊本インターハイの時もそうだったし、平成十九年の唐津インターハイの時もそうだったが、九州でインターハイが開催される時は事前合宿で鶴鳴に仲間が集まる。この年は福井商業、徳島城北、九州女子、鶴鳴の四校で合宿をした。インターハイやウインターカップ直前に行う合宿は、春休み合宿や冬休み合宿のように強化が目的ではなく調整が目的だからあまりガンガンやらない。というのはたてまえで、動きが悪かったり負けたりするとこの監督もムキになる。その調整役は私がやらなければならない。

長崎インターハイの事前合宿は熊本インターハイの時のような猛暑ではなかったため滝壺には行かなかった。普通に調整をして普通に大会に入った。会場は諫早市だから泊まるには近すぎる。鶴鳴は長崎から通った。合宿に参加したチームは会場周辺の宿舎に泊まるが、鶴鳴に事前合宿で泊まったチームはすべてマイクロバスという移動手段を持っているチームなので、諫早市の隣りの小浜町という温泉街に配宿された。会場から二三kmの距離なのでマイクロバスでの移動は片道約三〇分かかる。

小浜町というのは長崎県高校駅伝大会がいつもここで行われる場所で、鶴鳴が駅伝大会に参加する時は定宿にしているつたやという温泉旅館がある。鶴鳴で合宿したチームはすべてここに配宿された。私が配宿依頼をしたのではなく、高体連が指定した偶然だ。私は鶴鳴で合宿したチームの宿舎がつたや旅館だと聞いてすぐおかみさんに電話をした。

「今回お世話になるバスケットのチームはみんな私の仲間で直前まで鶴鳴で合宿していたチームなんですよ。もし、監督がわがままを言ったり無理なお願いをしたりしたらすぐ私に電話くださいね。ヤキを入れますから」

【案内文書】

平成十一年の夏、私は中学校の指導者の方々宛てに「今年の中学三年生の特待生のリクルート活動はしません。今の中学二年生が高校三年生になった時に長崎インターハイが開催されます。各学年の特待生枠は三名ですが、現中学三年生の枠を繰り越して五、六名取らなければ長崎インターハイの上位は狙えないからです」と書いたハガキを出しました。

その瞬間から私の長崎インターハイが始まりました。以来三年間、ずーっと長崎インターハイという重荷を背負って歩き続けてきました。今の私は、長崎直撃コースをとって沖縄付近を北上中の大型台風をじっと待ち受けているという心境です。「お前がいくら暴れてもビクともしないぞ」という気持ちと「頼むから長崎直撃ではなく南の方に進路を変えてくれ」という気持ちとがせめぎあっています。

昨年の一〇月二〇日、私は主将を立川に指名しました。インターハイの開会式では地元代表チームの主将が選手宣誓をします。インターハイの主会場は諫早市。立川は諫早市出身です。私が主将に立川を指名したのは、生まれ育った故郷の舞台で立川に選手宣誓をさせたかったからです。本当は夏休み中に主将の指名をしなければならなかったのですが、立川がどん底状態だったので指名が負担になると思い、どん底を抜け出すのを待って指名しました。この主将指名を始め、ケガや病氣、長期スランプ、人間関係のもつれなど、さ

まざまなことが鶴鳴を翻弄して過ぎ去っていきました。でも、致命傷となるような事故や事件は残っていません。スロツトル全開で臨みます。

【結果報告】二宮（誠英戦で左手小指骨折）

平成十二年の夏、現三年生のリクルート活動を始めた時からずっと私の頭の中を占領してきた長崎ゆめ総体が本日十一時半に立ち去って行きました。

この報告書は、準決勝戦敗退後の六日夕方体育教官室で書いています。約五時間前、小野体育館の通路でたくさんの報道陣に囲まれてインタビュアーを受けました。その時、「この選手たちがよくここまでたどり着いたなと思っています。この子たちが為し得たインターハイ三位という結果を私は素直に誉めてやりたいと思います」と言いました。

これは、メディア向けのよそ行きコメントではありません。私の正直な気持ちです。この選手たちが…というのは、危なっかしい一面を改善できないままインターハイに突入した選手たちが…という意味です。

結果を誉めてはいますが結果に満足しているわけではありません。「お前は一方では選手たちを誉めながら一方では否定しているじゃないか」と、自分自身に矛盾を感じながらこの報告書を書いていきます。怒りと屈辱感が押し寄せては引き、押し寄せては引きしています。私がかここで導いてきた選手たちが、自分を信じることも仲間を信じることもできず、私の指示も耳に入らず、ただ右往左往しているのを三〇分間も見続ければならなかったのが耐えられないのです。

ちよつとした事件が起こればパニックに陥る選手たちばかりでそれがなかなか改善されず、それをずっと引きずったままこの大会を迎えたのですが、ともかくにも全国ベスト四まで登り詰めたのですから「私たちだってやればできるんだ」と思い、自ら敵に立ち向かっていく選手の姿を一瞬でもいいから見たかったです。そんなことを考えていると怒りが込み上げてくるのです。

でも、少し時間が経ってから気付いたことがあります。それはジャトウが加入した時からずっと、ジャトウの特性を見抜き、それを引き出し、それをどうチームに組み込むかということと、谷川の七ヶ月に渡るブルランクをどう立ち直らせるかということに私の注意力が向けられ、他の選手の個々の力を高めるために費やしてやる時間が足りなかったのかもしいということでした。

追伸 二宮は二回戦の誠英戦で左手の第五中手骨を骨折しましたがそのまま最終戦まで頑張りました。

四 投書

インターハイのあと匿名で郵便が届いた。それには新聞記事の切り抜きが同封されていて、私に対する批判文が書かれていた。私はミスタータイガースと言われた阪神の掛布選手が、左膝半月板傷めて手術したあとしばらく不調だった時に、阪神ファンからバッシングを受けたことを思い出した。車のボンネットに「やめろ」「死ぬ」と書かれ、ちよつどその不調が結婚後間もなくの出来事だったので奥さんまでいろんな嫌がを受けたそうだ。私の著書の初版『チームを創る』『値千金』『値二千金』に書いているように、鶴鳴は昭和五二年から五四年までの三年間毎年、どれかの大会でベスト八以上の好成績を残し、特に昭和五三年の全国選抜大会（当時は三月に行われていた）では準優勝だった。ところが私は昭和五四年の秋に突然の腎出血で長期入院しなければならなくなり、それから二年間のブルランクを余儀なくされた。

その間リクルートができておらず、復活後の昭和五七年から五九年の三年間は、新人戦からずっと負け続けて県高校総体だけはやっと勝つという苦しい台所事情だった。この期間の私の生き様は私の人生の中では私が知っている指導者の苦労も含めてもっとも壮絶な三年間だったし、自画自賛ではないがコマが揃った時の全国優勝よりもはるかに価値がある県総体優勝だったと思っっている。



山崎純男先生
 こんな先生方がいらっしゃいます。本当に残念です、なぜ外人を入れたのですか？最初に優勝された時は、意外の選手はいなかったではないですか！！先生しっかりして下さい。



〒851-0115
 長崎市かき道 3-17-10
 山崎純男様

長崎新聞記事の切り抜きだと思う

しかし、そんな昔の苦勞話は長崎ゆめ総体時のスポーツファンにとっては知ったことではない。そんな人々たちにとっては、今自分の身近で開催されている長崎ゆめ総体という視点に立てば、新聞切り抜きの指導者は「こんなに苦勞した人がいる」となるし、山崎純男は「外人を取ってまで勝ちたいのか」となるのだ。

平成三年のインターハイ優勝は純長崎県産の選手ばかりだったし、その後県外から数人鶴鳴に來た選手がいるが基本的に私が勧誘するのではなく自主志願で来てくれる選手ばかりだった。だいたい、大物選手はいくらリクルート活動をして日本一の最西端の長崎には来てくれない。だから長崎でバスケットボールのやっ

っている限り毎年全国大会の上位に食い込むのは至難の業なのである。ところが、平成十五年度は長崎でインターハイが開催される。「選手に恵まれなかったから上位入賞できませんでした」では済まされないのだ。この年も、県内の優秀選手はほとんどリクルートできた。しかしそれでも平成三年に比べると格段に落ちる。特にビッグセンターがいない。そこで留學生獲得となった。

「そこまでして勝たなくてもいいじゃないか」という批判に対しては、勝海舟が福沢諭吉に非難された時に返した返事の「御議論數百言御指摘、実に慙愧(ざんき)に堪えず、御深志忝く(かたじけなく)存じ候。行蔵は我に存ず。毀誉(きよ)は他人の主張、我に与らず我に關せずと存じ候」で締めくくりとしたい。

話を換えよう。濱口典子は平成三年のインターハイ優勝時の鶴鳴のセンタープレーヤーである。彼女は高校三年生の時に日本代表選手に選ばれ、実業団に進んでからは二回オリンピック大会に出場した。私は彼女がまだ高校在学中に「お前、サイン文字を練習しろ」と言った。

濱口は「いいえ、私はそんな...」と言って拒んだ。濱口は「私は人にサインしてやるような選手ではなくまだ未熟者です」と言いたかったのだ。この時点ではまだ未熟者だ。それは分かっている。私は「お前が好むと好まざるとに関わらず、そのうち街行く人からサインを求められようになるし、今でさえ小学生や中学生のクリニックにお前を連れて行けばこどもたちからサインを求められる。これからは、自分の意に沿う沿わないにかかわらず、それを拒ばない選手にならなければならぬんだ」と言った。

濱口は思春期の女子学生とは異なり街を歩くのを嫌がっていた。顔も名前も知られないうちからただ大きい女の子というだけで目立つから行き交う人々の視線を感じる。それが嫌なのだ。しかしこれからはそれに加えて名前も顔も知られ、バスケットのファンも増えてきて憧れの対象にもなる。が、ひとたびバスケットの成績が振るわなくなるとこれまでファンだったひとたちからバッシングの嵐に遭う。これは、世に名を知られるようになった者の宿命だ。それが煩わしかったらバスケットを辞めればいい。でも、これからも自分の可能性に挑戦したかったらそれは宿命だと思つて受け入れなければならない。そう教えて実業団に送り出した。

平成十五年九月 ウインターカップ予選 優勝 スタメン 立川 谷川 林田 高岡 ジャトウ

【案内文書】

インターハイ後のことについてお話しします。インターハイ以後は一对一の練習しかやっていません。これは、ジャトウをいかにチーム内で機能させるかということばかりに気を取られすぎて、約四ヶ月間にわたつて他の選手の個人技能のレベルアップをおろそかにしていたという反省に基づくものですが、一对一の練習中も私の視線はジャトウから離れません。

一年生というのはちょっと目を離せば、治つたはずの悪いクセが元に戻っていますし、注意されたことは頭の中から何処かへ消えてなくなっています。ジャトウのそれは他の一年生と桁外れにひどいから目が離せないんです。

「お前はいつもハイというだけで何もやりやしない」「個人練習の課題を与えても三日坊主」「自己チェックは全然しない」「お前を信用しているチームメートは一人もないよ!」そんな小言を毎日言われ、週に一回は「きさま!外へ出て行け!」と、体育館から追い出され、しょっちゅう泣きながら練習していましたが、インターハイ後はどんなに私から叱られても泣かなくなりました。

この夏、いいことがあつたといえれば前述のようにジャトウがたくましくなつたことと谷川が八月末の遠征で本当にいい仕事をしてくれたことです。悪い出来事は下級生にケガ人が続出したことです。ジャトウと谷川に加えて立川・林田・二宮・清水は強い相手との試合では欠くことができない存在ですが、この選手たちを少しでも楽にさせてやるにはその次の選手たちがこの夏一对一で力をつけなければなりません。それなのに、八月中旬以降相次いで三人が捻挫、一人が強度筋肉痛、一人が発熱など、下級生の中で次々に戦線離脱する選手が出てきて、強化どころかこの夏は主力選手だけの練習しかできませんでした。

肝心なときにケガをする。肝心な時に病気になる。肝心な時に五反則退場する。そんな選手がいるチームは厳しい試合をものにするにはなかなかできないものです。鶴鳴が本当に強くなるにはもう少し時間がかりそうです。

【結果報告】二宮（骨折り八中）金床（捻挫癒えず。長い!）ジャトウ（足底筋膜炎）

九月十七日付けの案内文書に「下級生にケガ人が多くて!」というグチを書きました。翌日の九月十八日にジャトウの足底筋膜炎の痛みがとうとうチームメートと一緒に練習できない域に達してしまいました。

この日以来ジャトウは走ったり跳んだりするのは一切禁止して、五日間はハンドリングの練習だけとし、六日目から自転車漕ぎを取り入れ、八日目と九日目はグラウンドで3kmのペース走をさせました。一〇日目がこの大会の初日です。ということは、ジャトウは大会直前はまったくチーム練習に参加せずにこの大会に臨んだわけです。完治していないのに無理させましたから大会終了後の今日からまたしばらく足を使った練習はさせません。

案内文書を書いた時は二宮の第五中手骨骨折は完治していませんでした。そこで誰をスタメンにするか考へなければならぬのですが、私は迷わず一年生の高岡をスタメンに使うことに決めました。高岡をスタメンにした理由は、彼女だけが夏休みの練習をケガなく生き残つた唯一の下級生だからです。そしてもう一人、チャンスがあればどうしても試合に出してやりたい選手がいました。小野原です。彼女は私のリクル

ト網の中には入っておらず、自ら志願して入部した一年生です。商業科ですから検定のための補習で練習に遅れてきたり、日曜日は検定で練習に参加できなかったりします。実は今回も初日は簿記の検定と重なって会場に着いたのが試合終了後でした。

一方この大会には絶対出したくなかった選手たちがいます。それは、夏休みの苦しい時期にケガや病気で戦線離脱した選手たちです。一番苦しい時期にチーム練習に参加しなくて、試合になったら「もう治りました」と言ってお二フオームを着て晴れ舞台に立てるほど勝負の世界は甘くありません。

ですが、そんなことをしていたら次の新人戦の戦いが苦しくなります。ですから背に腹は替えられず下級生をずいぶん使いました。そんなこんなで腹立たしいことばかりが続いたのでベンチからは罵声の連続でした。罵声は浴びせましたがチームはインターハイ時より確実に強くなっていると思います。

【選評 山崎純男コメント】

第三ピリオド以外は滞った場面はまったくなく、得点経過から見れば鶴鳴の余裕勝利。しかし、内容では随所で鶴鳴選手の学習不足が露見する場面があった。特にディフェンスの読み切りが甘く、しばしば長崎商業の単純なドライブを許していた。

このような甘さが改善されないうままインターカップに臨むようでは鶴鳴の上位進出は見込めない。試合内容や点差はともあれ、大半のチームは三年生がリタイヤして新人で臨むこの大会で、三年生がリーダーシップをもってこの大会に臨んだ長崎商業は立派である。

毎年、一七〇cm以上の選手は皆無という状況ながら優勝戦線に食い込んでくる長崎商業には頭が下がる。鶴鳴は今年ジャトウが加入し、桜花学園、東京成徳、中村学園などに決して体格ではひけをとらない。長崎商業の奮闘ぶりを見て鶴鳴の選手は襟を正し、自分を見つめ直し、インターカップには必勝の気構えを持って臨んで欲しい。

五 浜松国体

平成十五年一〇月 国体 三回戦敗退 スタメン 立川 谷川 林田 出岐 ジャトウ

【案内文書】

インターハイが終了した時点ですぐ国体の組合せを予想しました。インターハイのベスト四が四隅のシード。ベスト八が中シードになりますが、優勝した桜花学園に負けた中村学園がランキング五位ということになるので、福岡が長崎のパートに中シードで入ってくることはわかっていました。インターハイ後、そのことを踏まえて練習はしてきましたが、国体というのはシード以外でもガラリと様相が変わるチームがあるので、抽選の結果によっては初戦から大変な試合を強いられる場合があります。

様相が変わるといふ点で重要なことは外国人枠の問題です。インターハイはルールで一チームにエントリーできる外国人は二名までと制限され、コートに立てる外国人は一名と決められています。ですからインターハイでは外国人を二人抱えているチームでも同時に二人出場させることはできず、交替で出さなければなりません。ところが、国体ではそのような規定はなく、外国人留学生は二人同時に出せるのです。

そういう観点で組合せを見ると、隣りの富山は龍谷富山高校に一八〇cmと一九五cmの中国人留学生がいるし、さらにその次には国府高校に大津の兼子と慶誠のラマを加えた熊本が待ちかまえています。福岡にたどり着くまでが大変です。

大変ですがちゃんと準備はしています。もっとも気をつけなければならないのがジャトウの反則です。彼女は過去二回、重要な試合の重要な場面で五反則退場をしています。日本の審判に慣れていなかったこともありすが感情を抑えられないのもその理由の一つです。でも、夏休み以降そのことはずいぶん改善されました。それに加えて夏休みの練習でプレイ上でも安定性が増してきました。

ジャトウの成長に加え、出岐（純心）、中川（純心）、鮎川（長崎商業）という久しぶりにスタメンロー

テーション入りができる補強選手を得られたということは、谷川や林田の得点力アップにつながりますから必ずインターハイ以上の試合が出来るはずです。あとは本番までケガをしないよう注意するだけです。

【結果報告】

長年コーチをしていると、「長崎に戻らず、このままどこかへ行ってしまうたい。誰にも会いたくない」と思うことが何回もあります。何度もそのような経験を重ねると、時が経つにつれて心の傷も癒え、またいずれ元の自分に戻るということはわかるようになります。しかし、いずれ元気を取り戻すということとはわかっていても、今はやっぱり「いつその世から消えてなくなりたい」という気持ちです。星野監督のように「悔しさを噛み殺してファンの前では明るく…」というようなさばさばした表情を作って人前に立つことはできません。悔しさを噛み殺すことは出来ませんが、試合を観ていない人にはこの報告書が唯一試合の推移を推し量る資料となりますので、私の感想を含めて経過を報告します。

最初の危機は第一ピリオド残り六分にジャトウが二つ目のファウルを犯した時でした。その後、ジャトウをベンチに下げている間に一〇点差を付けられて第一ピリオドを終わりました。

二回目の危機はジャトウが第二ピリオド五分のところまで三回目のファウルを犯した時でした。またジャトウをベンチに下げなければなりません。しかし、ラマのミスマッチ解消対策として敷いた三二ゾーンディフェンスを熊本は攻めあぐみ、六分間無得点だったので助かりました。その間長崎は、速攻やスリーポイントやインサイドプレイで加点し、逆に二点差をつけて前半を折り返しました。

三回目の危機は後半早々にやってきました。開始二分、ジャトウが四回目のファウルを犯してしまつたのです。試合終了まで残り十八分もあります。本当の勝負所が来るまではジャトウは温存しなければなりません。その後、他の選手がなんとか凌いでくれているので我慢に我慢を重ね、ジャトウを出さないまま第三ピリオドを終わりました。その時のスコアは五六対五四と二点のビハインドでした。

第四ピリオドは当然ジャトウを出します。ところが、第二ピリオドにジャトウがいなのに逆転された熊本と同じように、第四ピリオドにジャトウをコートに送り出したのに今度は長崎が逆に点差を開けられてしまつたのです。でも、残り三分を過ぎてから長崎は粘りに粘り、ジャトウのフリースロー、ジャトウの速攻レイアップ、林田のスリーポイントと立て続けに追い上げ、残り三〇秒を切つてから出岐がスリーポイントを決めて遂に七二対七一と逆転しました。しかしその後熊本は最後の攻撃でラマが残り二・八秒でハイポストから打つたジャンプショットが決まり、勝負をもぎ取っていきましました。

ジャトウのファウルトラブルについては徹底的に教育したと思つていましたがジャトウの気持ちの中にまでは浸透していませんでした。私の念押し不足です。すませんでした。

【ジャトウ対ラマ】

五月に熊本まで練習試合に出かけていったのは、ジャトウやラマのストレス解消のために母国語で腹一杯お喋りをさせてやるためであつた。二人で話しをしている時は互いにとても楽しそうである。が、日本にたつた二人しかいないセネガル人なので仲がよさそうにしているが実はそうでもない。特にジャトウはプレイではラマの足下にも及ばないくせに学習成績では負けないのでライバル心むき出しなのだ。

ジャトウの三つめのファウルがまさにライバル心がむき出しの、感情コントロールが効かないプレイだつた。ジャトウがディフェンスリバウンドを取ろうとしてジャンプした頭の上からラマにそのボールごぼう抜きされ、カットなつたジャトウは振り向きざまひじ鉄を入れてファウルを取られたのである。おまけにそれがバスケットカウントになつた。

私はジャトウをベンチに下げ「バカかお前は！この試合がどれだけ重要な試合かわかっているのか！これまでの重要な試合すべてがお前のファウルトラブルで潰れている！もっと冷静になれ！」と怒鳴りつけた。この試合に勝てばベスト八に入れる。国体ではベスト八以上が天皇杯得点につながるのだ。そんなに重要な試合をジャトウの個人的な感情で台無しにされた。

六 ウィンターカップ

平成十五年十二月 ウィンターカップ 三位 スタメン 立川 谷川 林田 二宮 ジャトウ

【案内文書】

オフセンスにしろディフェンスにしろ、プレイには必ず

仕掛け

中盤

最終

の三段階があります。

ジャトウにはもちろん技術的にも体力的にも仕込まなければならない基礎的な課題がたくさんありますが、プレイの最終段階の微調整感覚を急いで身につけさせなければなりません。

例えばディフェンス。

「やられた！」「仕掛けの段階。

でも追いかける」中盤の段階。

「間に合った！ブロックショットだ！」「最終段階のA

」間に合わない！ブロックショットは脅しだけにしておこう」「最終段階のB

がその一例です。

ジャトウは、AとBの判別ができなかったり、判別しても自分を制御できなくてファウルをしてしまったり。そんなジャトウは四〇分間フルに出場させることはできませんし、勝敗に関わるプレイでチームを有利に導いたり危機を救ってくれたりする存在として期待することはできません。

普通に考えれば「一年生だからまあいいや」で済まされることですが、ジャトウは三年間クレインズ在籍中の全国大会八試合のすべてにおいて、勝敗を左右する場面でコートに立っていて貰わなければセネガルから連れてきた意味がありません。だから「まず基本をみっちり教えてから…」などと悠長なことは言ってもらえないんです。

練習中に危険なプレイや無分別なプレイまたは注意力を欠いたプレイをすると「待てコラ！お前はそこからカゲたプレイで二回も鶴鳴の大事な試合をぶち壊したんだぞ！わかっているのか！」と毎日のように私から怒鳴りつけられます。でも、国体後自覚が芽生えてきたのか、自習時間に着替えてシューティングをしたりグラウンドに走りに行ったりするようになりました。夏休み前には考えられなかったことです。

主力の三年生たちはみな元気です。通常、国体後ウィンターカップまでに三年生が伸びるということはあまり期待できませんが、今年の三年生は国体後巧くなりました。

【結果報告】

「国体以後上級生が安定してきました」と案内文書でお知らせしましたがそれはメッキでも付け焼き刃でもありませんでした。ホンモノでした。私はそのことが嬉しいのです。人間という生き物は訓練すればこれほど変わるんだということ、彼女たちが最後の最後に証明してくれました。そのことがとても嬉しいのです。

つい二ヶ月前までは何をやらせてもふがいない彼女たちに対して私は「卒業したら二度と俺の前に姿を現すな！今すぐにもお前らの顔をここから消し去りたい」などと悪態をつけていました。それを今ここで撤回します。そして「ありがとう」ということばに置き換えます。

試合の結果やボックススコアや戦評はインターネットで見ることができるので裏舞台を報告します。夏休み以降「ウィンターカップは中村学園戦がヤマだな」と思っていました。個人個人を比べると中村学園が格上だと思ったのでマンツーマンディフェンスではなく三二のマッチアップゾーンでスタートしました。ゾーンだと相手は攻撃のバランスを整えるのに少し時間を使うだろうと思ったし、一人が二箇所ずつ守るので

なければ中村学園に太刀打ちできないと思ったからです。それで「勝負はまだ分からないぞ」という場面ができるだけ長く引つ張ってほしいと考えたのです。

準決勝の桜花学園戦もまったく同じ考えで臨みました。結果はインターネットでご覧の通りですが、いくら監督が知恵を搾り出しても選手がその意図を充分理解して動いてくれなければ好結果は生まれません。今回のような結果をもたらしたのは、選手たちが私の意図の理解プラスで頑張ってくれたからです。心配ばかりかけた選手たちでしたが、最後にお世話になった方々に恩返しをすることができました。

三位決定戦はオールコートプレス。昨日の桜花学園戦で選手たちは心身ともに疲れ切っています。普通をやったらダレた試合になると思ったので敢えてスタートからムチを入れました。決して銅メダルが欲しかったからではありません。昨日の桜花学園戦で彼女たちは立派だったというのは証明済みですから四位でも三位でもよかったです。ただ「これだけ大勢の観客に観て貰って、三位決定戦はつまらないなあ、と言わせる試合だけはしたくない」そう思ったので選手たちにハツパをかけました。彼女たちは見事にそれに応えてくれました。最後のインタビュでメディアの方々に「感想は？」と問われ、私は即座に「ハナマルです」と答えました。私の素直な気持ちです。

【谷川ベスト五】

二年生の七月から翌年の二月まで体調不良でブランクがあった谷川が、三年生最後のウィンターカップの表彰式でベスト五に選ばれた。高校での部活動は実質ウィンターカップまでプレイできる選手は二年九ヶ月部活動ができるが、大半の選手は六月の県高校総体で終わる。そんな選手は高校での部活動は二年三ヶ月しかできない。実業団と違って高校部活動の厳しさはそこにある。ブランクがあっても引退時期を延ばすことができないのだ。だから、高校在学中に大きなケガや病気をすれば、その時点で高校での部活動は終わっても同然なのだ。そういう意味で谷川のウィンターカップベスト五は奇跡といってもいいほどの快挙である。それはもちろん谷川本人の努力の賜であるが、その一方で決して忘れてはならないことがある。それは残り七人の三年生たちの苦勞である。谷川が体調不良になってから復帰するまでの七人は、常に谷川の心身の状態を気遣って谷川専用のアンテナを一本取り付けた生活をしなければならなかった。

加えてジャトウにもまた手がかかる。これにも専用アンテナを取り付けなければならない。平成十五年度は全国大会でとりあえず面目を保てた結果を出せたが、その裏には他人には計り知れないほどのストレスと戦いながら体育館に通い続けた七人の苦勞を決して忘れてはならないと私は思っている。